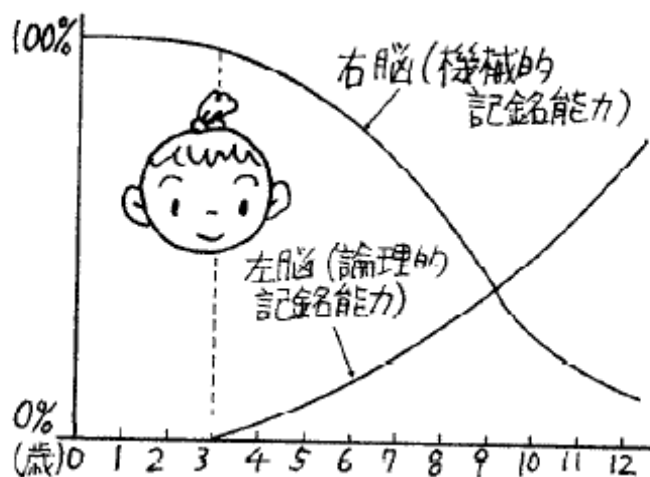


人間の記憶力は三歳がピーク

ここでちょっと角度を変えて、幼児の脳の発達の仕組みから漢字教育というものを考えてみることにしましょう。

ここでまず知っておいていただきたいのは、0～六歳までの乳幼児期は、いわゆる「右脳優位」と呼ばれる時期で、「左脳優位」の私たち大人の脳とはまったく違った働きをしていることです。



脳の成長のイメージ図

ご存じの方も多いと思いますが、左脳は“言語脳”とも呼ばれ、言葉を使って理屈でものを考える脳です。これに対して、右脳は言葉を仲介せず、空間

や位置関係を認識したり、音楽や絵画の素暗らしさを感じ取ったりする、いうなれば“イメージ脳”で、目にしたもの、耳にしたものをそのまま全体のイメージとしてとらえるのが得意です。

ですから右脳優位の幼児は、理解できないものでも、まるでカメラのシャッターを切るように、そっくりそのままイメージとして頭の中に取り込んでしまう、大人にはない特殊な能力を持っているのです。

幼児が丸暗記の天才なのも、こうした理由からなのです。

このように、物事を理屈で理解するのに必要な言葉の力が十分でない幼児にとって、漢字は、外界から情報を吸収するための、きわめて有効な手段となっているのです。

ところが、大脳生理学の権威、時実利彦博士も「記憶力は三歳児が最高で、以後は年ごとに低下する」と述べているように、こうした幼児特有の丸暗記能力(これを「機械的記銘能力」という)は、0～三歳をピークに、その後は徐々に低下しはじめます。

そして、特に左脳の働きが活発となる九歳を過ぎたあたりからは、急激に衰えてしまうのです。

私の経験から言いましても、漢字を覚える能力は、大人より子ども、中学生より小学生、そして小学生よりも幼児のほうが明らかにすぐれています。

また、自分が興味・関心をもっていることであれば、同じことをくり返しても飽きることがない、というのも右脳優位の幼児期の大きな特徴です。お子さんにせがまれ、お気に入りの絵本を一日に何度も何度も読まされた、という経験は、おそらく多くのお母さんがおもちではないでしょうか。

漢字学習にしても、幼児が興味をもちやすい身近な言葉を、遊びの延長として教えてあげますと、子どもたちは反復を少しも苦にしないばかりか、「もっと、もっと」と進んでやりたがるようになります。

こうした点からも、幼児期のほうが、小学校に上がってからよりもずっと早く、そしてずっと楽に漢字を身につけることができるのです。